

■ フォト・エッセイ ■

ラオスの結婚式

写真文
山田七絵
Nanae Yamada



新婦宅にて。ようやく再会した新郎新婦と祈祷師の老人

もう三年も前のことになるが、二〇〇五年四月某日、私のもとにラオスから一通の封書が届いた。差出人は日本に留学後、帰国して教職についたばかりの友人P氏である。封を切った瞬間、強い香の匂いが立ち上る。同封されたカードには金色の字でこうあった。「盛夏の候皆様には益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。このたび(中略)結婚式を挙げるになりました」。

五月初旬、休暇を取った私はバンコクのファランポーン駅からタイ・ラオス国境の町ノンカイに向かう寝台列車に乗っていた。初めてラオスを訪れたのは約半年前、たった二週間の滞在であったが、人々の控えめでさりげない優しさ、自然と共生する姿に魅了され、大好きな国の一つになった。列車の音だけがガタガタと聞こえる車内でベッドに寝転び、天井を見上げていると、結婚式に出席できる喜びに心が躍った。

約一〇時間後列車はノンカイに到着した。私はメコン川に架かる友好橋のたもとで無事入国手続きを終え、昼過ぎにようやく首都ビエンチャンに到着した。すぐにホテルから新郎に電話をかけ、昼食に合流するため近くのレストランに向かった。結婚前恒例の出家で髪が短くなった新郎とその友人たちは、ラオスが世界に誇る国産ビール、ピア・ラーオと野菜やハーブをふんだんに使ったラオス料理に舌鼓をうっていた。昼食後は夕方まで新郎の親戚や友人が市内を案内してくれ、夜は新郎宅で行わ



結婚式当日の朝、新郎宅にて。列席者は飾りから伸びた白い糸を手に挟んで祝福の祈りを捧げ、新郎を送り出す



付添い人は、新婦宅到着までロウソクの炎と新郎を守る



二人の結婚記念写真

れた結婚の前夜祭に参加した。

式当日、新郎側の招待客は午前一〇時に新郎宅に再集合した。居間はすっかり掃き清められ、前夜の大宴会の痕跡は残っていない。正装した新郎が両親に付き添われて座っており、その前には黄色い花、バナナの葉、米などで作られた大きな飾り盆が置いてある。飾りの天辺にはバシーと呼ばれる木綿の白い糸が張り巡らされている。招待客は短く切った糸を配られると新郎の前進み、祝いの言葉をかけながらお互いの手首に結び合う。バシーには、相手への祝福の祈りが込められている。

銀色の剣と花の飾りを携えた新郎は、一一時頃いよいよ車で家を後にした。新郎は新婦宅付近で下車し、追いついた親戚や招待客と共に一路新婦の家を目指す。先頭に立つ新郎の隣には、こうもり傘掲げた親友が付き添った。これは飾りのロウソクの炎が消えないよう守ると同時に、新婦宅に入るまで新郎を日に当たらないという習慣による。付添い人は未婚の新郎の友人であり、選ばれるのは大変な名誉である。新婦宅の門が見えてくると、一行は突撃準備とばかりに一旦路上で停止した。誰かが独特のリズムで太鼓を打ち鳴らすと、皆祝いの歌を合唱し始め、勢いづいた一行は歌いながら新婦の家へと歩みを進める。なかには景気づけのためか、歩きながらウイスキーをおふる者もいる。

門の前では、待ち構えていた新婦の親族

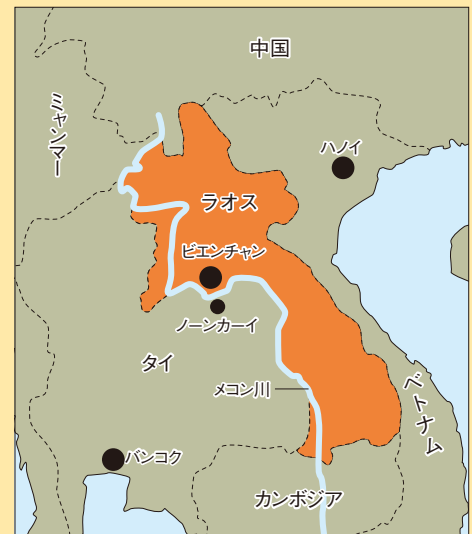
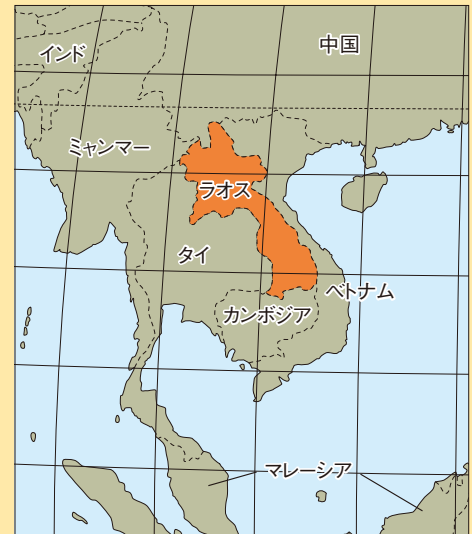
新郎一行は、新婦宅の手前で突撃準備とはかりに一旦停止した



太鼓を打ち鳴らし、歌いながら一路新婦宅へ



門にロープを張り、行く手を阻む新婦勢



や友人が門にロープを渡して進入を阻んでいる。新郎側は懇願したり、酒を勧めて懐柔しようとしたりするが、新婦側はそれを拒絶する素振りを見せる。しばらく儀式めいたやりとりが続けられた後、新郎が封筒に入った祝い金を手渡したのを合図にようやく門が開放され、新郎側の一行は歓喜の叫び声を上げながら新婦の家になだれ込んだ。関門を突破した瞬間の、人々のあふれるような笑顔が印象的だった。

奥の間には美しい伝統衣装に身を包んだ新婦が待機しており、その面前に新郎宅と同様の飾り盆が据えられていた。ここでもうやく新郎新婦が揃ったわけだが、もう一人、儀式を執り行ううえで不可欠な人物が同席している。祝い師（モー・ボン）の老人である。彼はともすれば体から抜け出してしまう魂「クワン」（＝金、運など良いこと全般を指す）を呼び戻し、新郎新婦の幸運を祈るスー・クワンの儀式を司る一種の祈禱師であり、結婚式には必ず登場するといふ。祝い師は嫁の家の守り神などに関する祝詞を唱える。その後、参列者一人ひとりが新郎と新婦に祝いの言葉をかけながら例の白い糸を二人の手首に結んでいく。招待客は、祝儀を招待状の封筒に入れて飾りの前におかれた銀色の皿の中に置く。儀式が終わる頃には、二人の手首には包帯のように分厚い白い糸の束が巻かれていた。筆者は見なかったが、ラオス人の友人によると通常この後新郎新婦を寝室へと導く儀式



指輪交換。腕には分厚い祝福の白い糸がみえる



関門突破の瞬間。歓声が沸き起こり、笑顔がこぼれる



ビエンチャン市内のホテルにて。結婚披露パーティーの様様



がある。誘導役は円満な家庭生活を長年続けていた既婚女性で、こちらも新郎の付添い人同様名誉な役目である。

夜は市内のホテルで五〇〇人規模の盛大な披露パーティーが開催された。かつては全ての儀式を新婦宅で行うのが主流であったが、最近では二次会をホテルで行うことが増えているという。式の費用は祝儀によって賄われるが、不足分は基本的に男性の家から黄金や現金で支払われる。金額は「9」が最も縁起が良いとされ、偶数は好まれない。例えば九バーツ（二キロ〇六六バーツ）の黄金、九九九九九九キップ（キップは通貨単位）の現金などが女性の家に贈られる。また、仲人選びはその後の人間関係に大きな影響を及ぼすので慎重に行われる。招待状の差出人もかつては四、五人の名を連ねたそうだが、最近では採め事を回避するため両親の名のみ記すことが多くなった（今回もそうであった）。

新郎新婦は私の帰国日に、抱えきれないほどのお土産を持たせて空港まで送ってくれた。結婚後は婿入り婚のため男性が女性の家に住むことになる。式後新郎が、同居は義父に気兼ねがある、と冗談めかして話していた。それから一年ほどして、二人の間に第一子が誕生したと聞いた。その子ももう二歳になる頃だろうか。いつか会える日を、楽しみにしている。

（やまだ ななえ／在北京海外派遣員）